

# 『障害者でもいいしょセミナー』

と き:2007年8月5日

ところ:札幌市視聴覚障害者センター



(左から見形さん、加古さん、石井さん)

司会(石井)

本日司会を勤めさせていただきます、石井です。これより「障害者でもいいしょ！」セミナー命の選別についてあなたはどのように考えていますかを開催させていただきます。

加古

司会の補助をします、加古です。

主催者あいさつ(DPI北海道ブロック会議事務局長:我妻)

皆さん、こんにちは。我妻と申します。

本来ですと、このセミナーの企画をしていた富田さんが挨拶をすることになっていましたが、このセミナー開催の直前に亡くなりました。

しかし、富田さんの思いを継ぐという意味からも本日開催いたしました。

それでは、富田さんが開催にあたってという原稿を残していますので、それを読み上げて私の挨拶といたします。

「開催にあたって」

本日は「障害者でもいいしょ！！」セミナーにご参加いただきありがとうございます。多くの方の参加のもとで、このようにセミナーを開催できますことを心から嬉しく思います。

さて、このセミナーは、今年9月に韓国で開催される第7回DPI世界会議韓国大会の30日前記念イベントとして、2007年度北海道ろうきん社会貢献助成事業により開催されるものです。

2006年12月に国連で採択された「障害者の権利条約」では、その前文で「障害をもつ人の固有の尊厳の尊重」が明記されました。これは、障害者の生命や存在の価値は、その他の社会の人々と同じ価値を持っていること、また、障害者に固有の存在のありかたは、それ(障害)ゆえに社会から排除されることなく尊重されるべきであることを、批准国に求めていると言えます。

しかし、私たちの住むこの社会では、障害をもつ人の尊厳ある生が保障されていない多くの現実があります。そのようななかで、受精卵の段階で、その遺伝子から障害があるかどうかを調べることで、障害をもっている生命を不幸で「あってはならないもの」として、生まれてこないようにしようとする着床前受精卵診断が、筋ジストロフィーなどを対象に行われています。これは、遺伝性の疾患や障害をもった人を「生きる価値のない生命」として排除する、新たな差別を生み出す危険性があるだけでなく、障害者がさらに生きづらい状況に置かれることになります。

そこで、このセミナーでは、遺伝性の障害をもつ女性当事者から、着床前受精卵診断とはどのようなものか、その危険性について問題提起を行います。そのうえで、全国の地域で暮らす障害をもつ当事者が障害者として生きてきた経験をもとに、「優生思想や差別」、「障害を肯定して生きること」、「尊厳死法制化などの障害者の生きる権利が奪われかねない現在の状況」などについて、当事者としての思いを語るなかで、会場のみなさんと議論を深め、一緒に考えていきたいと思えます。

ここ数年の間で、当事者や関係者の声を無視した「障害者自立支援法」の施行や生活保護の引き下げなどによる福祉の切捨てや「尊厳死法制化」や「臓器移植法改正」をめぐる動きなどは、自立支援やノーマライゼーションの掛け声とは裏腹に、重い障害をもつ人がますます生きづらい状況となってきています。

いま、そのような、状況であるからこそ、障害をもって生きることが「違い」や「文化」として認められ、「障害者でもいいしょ！！」と社会のなかで胸を張って生きていくことができるには、どうすればいいのか、改めて考えるときなのではないでしょうか。ぜひ、さまざまな立場の方から、提起や意見をいただき、有意義なセミナーにしたいと考えています。

最後になりましたが、このセミナーの開催にあたって、私たちの趣旨に賛同していただき、社会貢献助成事業として、資金面でご協力いただきました北海道労働金庫(ろうきん)様及び後援団体として、ご協力いただきました、北海道、札幌市、ならびに社会福祉法人北海道社会福祉協議会、社会福祉法人札幌市社会福祉協議会、全国自立生活センター協議会の方々、会場の提供を快諾いただきました社団法人札幌聴力障害者協会の高嶋事務局長様には、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2007年8月5日

DPI(障害者インターナショナル)北海道ブロック会議  
理事 富田 直史

司会補助(加古)

それでは、本日の司会進行役を務める石井さんのプロフィールをご紹介します。

1978年兵庫県神戸市に生まれる。幼少時に、シャルコ・マリー・トゥース病(以下CMT)と診断される。1997年兵庫県立播磨養護学校高等部卒業、1998年に兵庫県障害者高等技術専門学院を卒業後、「ジャスコ株式会社」へ就職する。その後、「NTTネオメイト」、「ヤマダ電機」などへ就職するが、2005年に体調不良により退職する。退職後、何か活動したいと思いホームページで知った、CMTの患者会発足にむけての委員に参加する。現在は「CMT患者会」の活動に加え、「自立生活センターリング」のスタッフとして、また「WING KOB E」、「ながた障害者支援センター」などで仲間とともに様々な活動をしている。好きなものは、GLAY、旅行、映画鑑賞だそうです。

よろしくお願ひします。

司会(石井)

それでは講演に入る前に、講師の見形さんのプロフィールを紹介します。

見形さんは、1969年、埼玉県春日部市に生まれる。幼少時にウィルドニヒ・ホフマン病と診断される。小学校までを在宅で過ごし、その後中高と埼玉県立蓮田養護学校に通いながら併設の国立療養所東埼玉病院に入所。1987年に同高等部を卒業。その後も入所を続ける傍ら趣味の音楽活動や障害者団体の活動に関わる。1997年国療を退所し、長年障害者に関わる仕事に就きたかった事もあり自立生活をさいたま市(旧浦和市)で始める。2001年に重度な障害者が地域の中でいきいきとありのままに生きられる社会作りとその介助システムの確立を目指し、障害を持つ仲間たちとその介助者と共に、「自立生活センターくれぱす、NPOぴあ・ぱれっと」を同時設立。現在、NPO法人自立生活センターくれぱす、NPO法人ぴあ・ぱれっとの理事。趣味は旅、カラオケ、音楽活動等だそうです。

それでは、見形さんよろしくお願いします。

見形

埼玉県にあるNPO法人「自立生活センターくれぱす」の見形と申します。

私が基調講演ということで最初にお話をさせていただくのですが、お手元の資料に沿ってお話をしたいと思っています。

パワーポイントの資料がありますが、これは別に印刷してお配りしています。

この「障害者でもいいしょセミナー」は、札幌にありますNPO法人「IL - ism」の富田さんが中心になって企画してきたものです。しかし、まさか富田さんが亡くなるとは誰も予想していませんでしたし、正直、このセミナーが開催できるかとも思いました。

でも、この間ずっと富田さんと準備をしてきたことですから、止めるわけにはいかないとも思いました。それで、今日は司会の石井さんや加古さんと三人で頑張ろうと決意したわけです。

今回の企画は、私たちが社会の中で、「どんなに重い障害があったとしても堂々と生きられる社会を目指していきたい。」そんな熱い思いを実現していくために発案されました。

まず、この富田さんがいる北海道をかわきりに始めようじゃないかというところで、この企画が生まれました。

私たちも、ここがスタートだと思っていますし、富田さんが「命」や「生きる」ということに本当に強くこだわってましたので、私たちも同じようなセミナーを地元でもやりたいと改めて思っています。障害を持っているからこそ、生きることの大切さを感じながら、今日から気持ちを新たに始めていきたいと思っています。

私は今の障害を持った体のままで生きていたいと思っています。

ありのままの私の思いをお話します。

さて、出生前診断ということですが、あとから配布している資料にもまとめていますが、簡単に言うと、生まれる前の赤ちゃんに障害があるか、ないかを判別するためのものです。一般的なものでは血液検査で染色体などに障害があるダウン症などが発見されます。特に高齢出産(通称マル高=35歳以上)などで様々なリスクを抱えがちな妊婦さんに検査が勧められるものです。

会場の皆さんの中でも勧められた経験がある方もいるでしょうか。

次第に、障害を持って生まれてくることが、生まれてきてはいけない命というふうな社会の価値観が作られています。

出生前診断の中で「着床前診断」というのがあります。これは遺伝子に障害のある、例えば、筋ジストロフィーの子供さんとかに対して選別の効果がある方法として使われています。

実際に、ある医者は不妊治療とか、流産を防止するとか、男女の生み分けができるなど患者にメリットだけを

説明します。そして、これが良い方法だと信じて多くの人は特に迷いもなく診断を受けるのです。それは何故でしょうか。

私たちが障害を持って生まれて、今日のいままでいろいろな社会の壁にぶち当たり、さまざまな抑圧を受けて生きてきました。「障害者は何もできない」とか「分かるわけがない」というレッテルと闘ってきました。決して生きやすい社会ではないですが、だからといって私は不幸ではないと思います。

でも、それが生まれる前に着床前診断で、まるでパソコンで字を削除してしまうようにゴミ箱に廃棄されてしまったら、障害のある人の存在がそこでなくなってしまうのです。

私は生まれるということは「選ぶ、選ばれる」ということではないと思って着床前診断に反対をしています。

実際にこの診断は、女性の体にどんな影響があるのか考えたとき身体に与えるリスクがとても高いのです。

女性には生涯与えられる卵子は本来決まっています、毎月1つの卵子が出てくる仕組みになっているそうです。それを薬を使って無理に卵子をたくさん誘発させていることに大きいリスクがあります。命がコントロールされている現実を女性には知ってほしいと思います。

ある方の話です。障害者同士で結婚をされ、めでたく妊娠をして産婦人科へ行ったそうです。その医者はどこにでもある普通の産婦人科だったそうです。本来なら「妊娠していますよ、おめでとうございます」といわれるそうですが、このとき医者には「困ったね、墮ろしに来たの」と言われたそうです。彼女はすごく傷つき、打ちのめされたそうです。

障害者が恋愛をして、子ども生み、育てることにに対して社会はマイナスのイメージでとらえます。

でも、医者から言われたことにに対して勇気を持って反論した障害者がいなかったら、やっぱり障害者は人に世話になっている身だから子供を産むなんておかしいことだという風潮に負けて、その子供たちはこの世に産まれることなく終わっていたでしょう。でもがんばって出産したそうです

この話は昔の話ではありません。数年前の話です。そういう現実が私たち障害者の中に、特に女性に大きくのしかかります。障害者である前に女性であるということが更に差別を生むのです。

そもそも女性の存在はこれまで低く見られていました。今は女性をマイノリティーとは言わないが、昔はマイノリティーでした。これには男尊女卑という思想があって日本の家制度が象徴的なように男性優位社会の歴史がありました。例えば、奥さんや家内という言葉に表されるように女性は家の中にいる存在でした。

今は男女共同参画社会とか言われて、男女雇用機会均等法もあります。あとは女性運動といわれるものも戦後盛んに行われるようになって来ました。

でもいまだに、厚生労働大臣が『女性は出産マシン』という発言をしたり、女性に対する理解は進んでいない気がします。

その中で、私は女性として、障害者として二重の差別の中で暮らしてきました。

これは私だけではなく、今もレッテルを貼られて生きている障害者の女性がたくさんいます。

さきほど、着床前診断では大量の薬を注射され、卵子を増やすのですが、そのことで亡くなるケースもあるそうです。そういうハイリスクの中で障害を持っている受精卵は省かれていく。医者の団体は破棄しないと言っていますが、実際には生まれる前に捨てられているのです。

八百屋に並んでいる野菜はきれいで、曲がったり、ゆがんだものは並んでいません。それも形の悪いものが間引かれているからです。それと同じことを人間にも当てはめてやっているのです。

私はそのままの形で本当はいいと思います。よく「みんなが」と言う表現がいい例です。これは多くの人をさして「みんな」と言うのですが、障害者がそこに入っていない場合が多いですね。

ちょうど2ヶ月前にDPIの全国集会在神奈川でありまして、トミー(富田さん)も行っていました。その時生命倫理を考える分科会では「尊厳死について」彼がパネラーとして話をしました。その尊厳死にも優生思想が潜んでいます。着床前診断も同様です。

それゆえに障害者と女性がともに優生思想と闘ってきた歴史があります。

日本で以前にあった優生保護法という法律は優生思想が反映されたものであると聞いています。今は母体保護法に変わり、人間にとって優良な遺伝子を残すために女性が与えられた法律になっているのかなと思います。生むか生まないかを女性に決めさせたり(責任を負わせる)、間違っただけの情報や偏った情報によって本人が選ばざるを得ない状況が起こります。それは障害者が社会の荷物的な存在としか写らないからです。

尊厳死とは延命治療をせず(無駄に生きない)苦しまずに、美しい死を選ぶというものですが、その死の判断は医師や家族になります。ある危機的状態になると、その人の命をとめる。これも学会で指針を出していますが、尊厳死協会でも出しています。ありのままに生きていたいと思っても、死ぬことの権利が主張され法律が出来ようとしています。

しかし、障害者の生きる権利がきちんと保証されることが先だと思います。

私はいい死を語る、尊厳死の重要さがさっぱり分かりません。

私がこういった問題を意識するようになったきっかけは、病院に16年いたからだと思います。

その中で私は患者という括りで扱われてきました。そこでは女性としての尊厳というものはありませんでした。現在一人暮らしで24時間介護を受けていますが、同性介助が基本です。これは介助を受ける側もする側も互いの尊厳を守り、対等に権利があるという考えだからです。しかし、病院はそうではなかった。男性患者も女性患者も平等ということで女性患者は男性の看護師さんにも当たりました。トイレや入浴まで男性看護師が介助するのです。もちろん断ることは出来ません。それに抗議をした女性の患者がいましたが、受け入れられませんでした。それは、あなたは面倒を見てもらって、お世話になっている存在なのにわがままを言うとか、男性患者は女性看護師から介助を受けているからあなたも我慢しなさいとなります。私は女性らしく生きたいという思いと病院の患者に対しての処遇に異を唱える意味もあって病院を出ました。そのまま我慢していたら、私が私として生きていけないと思いました。

病院では月経があることは面倒くさいことと、位置づけられていました。思春期の頃から自分もそう思っていました。それは周りからの刷り込みだったのです。また病院の職員からは「子宮もいらない」と言われたこともあります。

そこには重症心身障害児の病棟もありますが、その人たちはみんな摘出していると言われました。私は12歳の時点で月経は自分にとって意味が無く使い道もないしどうせなら職員が言うように摘出手術すべきと真剣に思っていました。だから月経の量を減らす薬があるのですが、自らそれを使っていました。結局は勧められたものの手術しなくてすみました。ひょっとしたら何の知識もない子供でしたし、わからないまま摘出にOKしていたかもしれない。それは私だけではなく、他の患者にも同様に話をしていたことです。もしかしたら、他の仲間は手術を受けたのかもしれないと思うとぞっとします。

実際に他の身体障害者病院や知的障害者病院、精神障害者の病院でも女性だけではなく、男性も断種手術などを行われていた例があること後から知りました。ハンセン病の方たちもそうです。生まれてきてはいけない命として、扱われ捨てられました。

私のそばには、そういうことを経験してきた女性障害者が大勢います。

また、昨年見たビデオで、広島で子宮を摘出された女性障害者の生々しい話を聞くことが出来ました。

そんなことは人間としてあってはならないことだと強く思いました。

私は間違っただけの情報に最終的には巻き込まれずに、生まれたときの私のままで生きてこられて、ここにいられることが何よりも良かったと思っています。

筋ジストロフィー患者の場合は、生まれる以前に家族や兄弟の血液検査を行い、デュシェンヌ型の子供が生まれる確率を調べることが出来ます。患者が亡くなっても遺伝子が残され、家族などの発症率が調べられてしまう。その人が亡くなったとしても情報は生きている。その情報を使う家族がいると知ったときに、自分の存

在価値が否定されているような気がしました。今は、それに対してノーと言い続けていきたいと思っています。後ほどのトークショーで会場の皆さんとも思いを共有できたらと思っています。

障害者の命は要らない命ではありません。難病を持った多くの人たちも同じで、彼らが存在すること自体が大切なのです。それをまず発信できるのは、障害を持っている私たちだと思っています。

障害のない人たちの水準を基準に考えるではありません。障害を持っていてもその人らしくありのままに生きられる社会に、そんなメッセージへと転換していく力が私たち障害者には必要だと感じます。私にもその役割があると思っています。

そうしていかないと世の中がすごく窮屈になります。

最後に補足ですが、神経筋疾患ネットワークという団体の活動趣旨を資料で配布しました。それは「着床前診断に反対する」趣旨で、私たち3人もそのネットワークに入って活動しています。

発足は2005年ですが、「いらぬ命はない」というメッセージを伝えていくために設立しました。障害を持って生きることにこだわって、当事者が声を上げ始めています。ぜひ資料をご覧ください。

司会(石井)

ありがとうございました。ここで、休憩を入れたいと思います。



司会(石井)

それでは、後半部を再開します。

トークショー「障害者でええやんか～生命の価値はだれにも決められへん！」～出生前診断、優生思想及び尊厳死について、当事者として障害を肯定して生きる立場から語り合う～を始めます。

まず、講師の加古雄一さんのプロフィールを紹介します。

1976年愛知県東海市に生まれる。幼少時に進行性筋ジストロフィーと診断される。小中高とあわせて17年間を国立療養所鈴鹿病院で過ごす。三重県立四日市高等学校卒業後、自分の生活を自分で作りたいと退院。設計の仕事を目指し工作機械の設計の仕事に携わる。しばらく活動の後、カナダへホームステイをするなど転々と

したのち、2001年某大手学習塾に就職する。その頃同時に自立生活もスタート。2003年の時、自分が生きてきた事、経験してきたことをフル活用できる、障害者の自立支援をしたいと思い、「AJU自立の家」の仲間入りをする。現在、仲間と共に「自立生活センター生活塾」の事務局長として活動をしている。好きなものは、映画鑑賞とハードロックだそうです。

ここからは、見形さんと加古さんに進行をお願いいたします。

見形

加古さんとトークショーを担当しますので、よろしくお願いいたします。

ここでは私の愛称「みかちゃん」で呼んでください。

加古

これはトークショーですので、堅苦しくなく、私も自分の愛称「かこっち」をお願いいたします。

石井

改めまして、石井です。トークショーでは「まさこ」でお願いします。

加古

亡くなられた富田さんですが、私たちは「トミー」という愛称で呼んでいましたので、ここでも愛称で呼ぶことにしますが、「トミー」が作ったメッセージがありますので、「みかちゃん」に紹介してもらいます。

見形

出生前診断で産むか生まないかを女性が選ぶ、決めなければいけないというプレッシャーや、健康な子を産まなければいけないというプレッシャーの中で、どこまで選ぶということが出来るのかなという「トミー」の疑問です。「かこっち」どうですか。

加古

私は、今の社会には、障害を持って生まれることは不幸、幸せになれないというマイナスな考え方がまだまだ多く存在していると思います。私たちは生まれてきても幸せになれるというプラスのメッセージがあふれている世の中の方になることを願って、その世の中を目指して日々の活動をしています。

女性は、「障害者は不幸」というマイナスのメッセージに溢れかえっている現在の世の中で、産むか、生まないかの決断を迫られるわけです。そんな中で障害を持っていてもいきいきと幸せに生きられるなんて思えるわけもなく、「生まない」と判断をしてしまうように社会が追い込んでいると感じます。

そこに生んでしまった母親に責任や問題があるのではなく、本当にどうするべきなのかという公平な判断が出来る状態で無い社会に問題があると私は思います。

見形

先程、私もお話をしましたが、障害者が生まれるかどうかということが、女性が出産する上で大きな問題になっているかなと感じます。なぜそうなのかという疑問もあります。出産や育児に対してのサポートがあれば、例え障害があっても、なんの不安もないと思います。

しかし、現状は違いますから、障害児は生まないほうが良いと思ってしまう。これは女性個人の問題ではありません。その女性個人や相手の男性、家族が悪いわけでもないのに、その人や家族が責められるのはおかし

い。社会全体がその個人を認め、擁護する姿勢がないことが問題だと思います。

加古

そのとおりだと思います。そのような社会を、私たちは変えていきたいと思います。障害があって生まれてきても幸せになれるというメッセージを私たち障害者自身から発信していくことで社会を変えていけるのではないかと考えています。トミー(富田さん)が、このトークショーをやろうと、そして、テーマでもタイトルにもなっていますが、「障害者でもいいいっしょ!!」ということにこだわっていました。彼も自分の生きている姿を伝えることで、障害を持っていても楽しいことがあるということを伝えられたのだと思います。そんな考えからこのセミナーの企画が始まりました。

見形

着床前診断は、すごく肯定されているけど、とても危ないと思います。それは妊婦さんや女性だけに課せられていることではなくて、社会全体が治療という名の下に命を平然とコントロールしている。私たちが気づかぬままにいる怖さがあります。こういうことが優生思想につながると思うのです。

若い人たちには優生思想という言葉は馴染みがないと思いますが、メンデルの法則のような優れた遺伝子と優れていない遺伝子の選別ですね。極端に言えば、劣っている遺伝子は殺されてもいいというか、抹殺するような発想があります。

昔、兵庫県で不幸な子ども生まない運動というのがありました。トミー(富田さん)とも何度もこのことについて話していました。当時の最先端である子ども病院が神戸にできて、障害児が生まれるとその病院に入れられていたそうです。トミー(富田さん)もそうだったらしい。

石井

そうですね。ひとまずこの病院へ連れて行かれ、検査をされて、この病院でわからなければ他の病院へ連れて行かれる。

見形

ですから、子どもが安心して医療が受けられるための病院ではなくて、そういう子どもをなくするという発想から病院が生まれたという歴史があったということを知って、私は愕然としました。これも歴史的に兵庫県を皮切りに他県でも展開された。お母さん向けのものだと思いますが、行政が作ったパンフレットもあったようです。

加古

トミー(富田さん)は、子どもながらに病院に連れて行かれて、「ここは何だ?」と恐怖を鮮明に覚えていえて忘れられないと言っていました。私たちの世代は同じような経験をさせられていると思います。例えば、病院をたらい回しされて、いろいろな検査をされる。

不幸な子ども生まないという言葉に表れているように、障害を持った子どもを生むということが罪のように、社会がそう思っていた。そういう環境の中で障害のある人たちは、施設に入れられたり、病院をたらい回されたが、一番重い人たちは国立療養所へ入れられた。私も国立療養所鈴鹿病院というところにいましたが、そこにいたある人が「一生こういった病院(療養所)で安心して暮らすことがいいことなのだ」と言っていたことをました。中学生くらいの頃まで私もそう思いかけていたように、そこで暮らしていると漠然とそういった考えに流されてしまう怖さがあります。

見形

私も国立療養所に中学、高校、成人期と16年間いました。その中で自分のできることはほとんどなかった。病院という狭い中で、いろいろなサークルなどを作ってそれぞれが活動していましたが、何のためにここにいるのかとか、どんな希望を持って生きていったらいいのかなど、見失っていたように思います。ある筋ジスの患者さんが詩に書いていた言葉ですが「私たちは病棟内をぐるぐる回っている回遊魚」のようだ。自分もその一匹の魚だと考えた時に、言い知れない恐怖と闘っていたように思います。そんな閉塞的な中で生きていたのです。

でも、病院の中にいれば、いろいろな可能性を知ることなく終わって、それが当たり前の人生なのだと思うような雰囲気があった。

加古

この会場にも同じような経験をしている人はたくさんいると思います。

私たちは一般の社会では生きていちゃいけない存在であり、こういう環境に無理やり追い込んでいく今の社会のあり方について、とても問題を感じています。

障害があるから、病院や施設に入れて隔離されていくのだと率直に感じます。しかし、それは大きな間違いなのです。そこは変えていかないといけないと思っています。

ここに来た皆さんも同じだと思いますが、私たちが、障害者自身がしっかり見定める目を持って間違っていることには「ノー」と声を上げるべきだと思います。

見形

施設批判ということにもつながってくるかもしれませんが、病院・施設の中で自己実現というか、人間らしい生活はないと思っています。しかし、現在も施設は多いし、国立療養所も全国に約20ヵ所くらいありますし、病院の生活がいいと思っている人もいます。でも、それはその人が自己選択した結果ではなくて、そうさせられているといつか気づいてもらえる時が来ると思いながら、私たちはあきらめずに多くの人に問いかけていくことを知ってほしいと思っています。

トミーは「一生リハビリを続けたいといけない」と言われていたそうですし、障害を持っているあなた自身がだめだとも言われたそうです。そういう思春期を送ってきたことをよく話していました。

かこっちも同じような経験をしていますよね。

加古

私は小学生から鈴鹿病院に入っていましたが、同じ家族の中に筋ジスの叔父がいました。

筋ジスは遺伝性ですので、その遺伝子を私が引き継いだわけですが、それが分かった時点で、選ぶ余地もなく鈴鹿病院でした。それは何故かと考えてみると、その叔父は在宅で生活していましたが、すごくいろいろな嫌がらせを小・中学校で受けたそうです。そのことが私の親や家族全体の傷になっていて、それで私にも同じ思いをさせたくないということになったのだと、私は考えています。それで、5歳の時に国立療養所に入れられました。

自己決定とか、家族の決定とか簡単に言ってしまうますが、決めていく背景には社会に追い込まれての決定ということもあると思います。

見形

力のベクトルが良い方向に向いていないということですね。障害を持っている人のベクトルがマイナスの方

向に働くようになっていっている中で、私たちが生きざるを得ない。病院の中ではそれに立ち向かうには相当のエネルギーが必要で大変です。仮に社会に出ても否定的な力が私たち障害者に働いている。

加古

これは優生思想の表れだと思うのですが、マイナスなメッセージで傷つけられたりすることはやはり怖い。だから施設に入ったりする。これは本人だけではなく、家族にもマイナスのプレッシャーは社会から突きつけられている。

やはりそこに対して私たちが、明らかに「ノー」と言っていきたいと思います。

そして私たちは今、障害を肯定して生きているわけですが、初めからそうではなかった。やはり、否定的な考えに陥ったり、否定的になったり、その繰り返しを経験して、今に至っているのです。

見形

かこっち(加古さん)も言ってくれたように、生まれてきて祝福されなかった。私を含めて多くの人は、障害は克服するもので、健常者と同じ水準になってほしいという親の願いに頑張ってきたと思うし、私もそうだった。障害を克服することが健常者に勝つことと教えられてきた。私は障害が重くて、親には何もできないと思われていたし、実際に介助がなければ生きていけないが、親には頭で勝負しろと言われ続けてきた。障害者は迷惑な存在で、世話になってばかりいて何もできないから、せめて勉強は頑張りなさいと言われた。例えば、テストで100点をとっても、それは当たり前で喜んでくれない。

しかし、親も社会から抑圧されていたわけです。お客さんが来ると私は2階に上げられたり、障害のある私の存在を隠そうとしていた。小さい頃、私は存在し得ない人として扱われていたことで悲しかったし、いつも何故か思っていた。それがあとあとの自己否定につながってしまった気がします。

加古

私たちが生きている今の社会は、障害者が存在しないという価値観に基づいて構築されていて、それに無理やり当てはめていく。それに当てはまらない駄目な存在というメッセージにあふれていると思います。

私も社会の中で生きていける術を身につけるように言われました。例えば、体を使わずにやれる仕事で、安易にパソコンなどですね。その技術を身につけることが、障害を持っているあなたが勝てることだと言われて、誰よりも早く入力することなどを要求されていた。そういうシンドイ思いをしていたのです。

まさこも、そういった経験をしてきていますよね。

石井

私も加古さんが話しをしていたように、何もできないからパソコンだけでも勉強しなさいと言われてきた。

見形

自立支援法が実施されて、社会参加や就労支援と言われているけど、私のように重度の障害のある人は、社会参加してくださいと言われても、就労ひとつ取っても難しい。頑張れといわれても、これ以上は頑張れない。

これ以上どう頑張れば進学できるのか、就職できるのか、何も分からないまま社会と闘ってきた背景があります。

加古

就職でも、よく一般就労と言われるが、介助を必要とする私たちのような重度の障害のある人にはほぼ不可

能です。仕事をしている間は介助を使えないという制度にも関わらず、一方で就労支援という。

私も就職活動をして、結果的に就職先はあったのですが、就職活動中に沢山面接を受けて、ほとんどの会社から「障害者を雇ってやっている」というような抑圧的な態度を感じました。そういう中で私自身が悪いように思わされてしまう。就労で一番求められるのが身辺自立です。これは矛盾しているわけです。

見形

身辺自立ができていたら、就職だって頑張らなくてもいい。

でも、それは個人の努力が足りないせいなのかと思わせてしまうことに問題があります。

だから、身辺自立を求めるのが前提なら障害者雇用じゃないと思う。

加古

まさかも就職してからも自分のことは自分でやりなさいと言われていたと思うけど。

石井

私も就職活動をしてきて、何度も面接を受けました。就職し始めた頃は介助がいらなかったのですが、少し介助がいるようになると会社側から、ここでは難しいのではないかというようなことを言われた。

加古

そういう現実がある中で、社会全体で障害者にどういことが壁になっているのかということを考えていかなないと本当の意味での機会平等にはならないと思います。

だから、こういうところから社会に発信していきたいと思っています。

見形

障害を持っていても、それがリスクと言われない社会にしていきたいですね。そこが問題であるということをお話していきたいですね。確かにすぐには変えられないという現実がありますが、まず知ることから始められることもある。そのひとつに自立生活もある。

私たちが自立生活をすることで回りを変えていける。これはトミー(富田さん)も自分が存在するだけで、回りの人たちが、社会が変わってきたと言っている。

私も障害者が存在することに意味があると思っています。特別なことではなくて、私たちが当たり前で地域のなかで暮らしていることに意味のあると思います。たったそれだけのことと言われるかもしれませんが、すごく大切なことだと思います。

加古

大きな壁を壊すことも大切ですが、トミー(富田さん)と身近な壁である恋愛のことも話をしていました。障害者だから恋愛すること、結婚することをいうのはタブーのように言われている。障害を持っていても一人の人として好きな人ができるとか、家庭を持ちたいというのは自然なことだと思います。

特に障害者が性の問題を語るのタブー視されているように感じます。本当は、ここでトミー(富田さん)とも話をしたかったですけれども、出来ないことが残念でなりません。

私たちは、恋愛や性の問題からも一線を引かれていて、その根底には優勢思想が根深く影響しているように思います。

見形

トミー(富田さん)も障害を持っていても家庭を持って普通に暮らしたいと思っていただろうし、実現しようとしていたと思う。病院の中では、恋愛、特に結婚については茶化されたり、面白おかしく扱われたり、誤魔化してしまう回りの問題が大きい。男性も女性も当然として持っている権利が侵されてしまう。

でも、病院の職員個人のせいだけでなく、やはり土台にある考え方(障害者は半人前とか…)知らず知らずのうちに浸透しているためかと。

その人の人生にとって大切なことであるのに、誰にも言えない。でも、本人ときちんと周りの人間が向き合って話をしてほしいと思っています。

普通に人が人を好きになることが何故いけないのでしょうか。

加古

よくある話で、恋愛をして付き合うことまでは良いけれども、結婚はできないと言われてしまう。必ず「自分のこともまともにできないのに、子育てをするなんて出来るはずがない」という事になる。こういう考え方を何とかしたい。

しかし、最近は障害を持って子育てしている人も増えてきたと感ずます。名古屋でも夫婦で介助者を使いながら子育てをしている人がいます。その家庭は幸せにあふれていますし、その家庭がいけないとは思えない。そういう家庭を祝福して、支援できるような社会や仕組みがいます。

見形

そういう恋愛談義が、トミー(富田さん)を交えてできると良かったのですが。

かこっち(加古さん)も雅子(石井さん)も恋愛や失恋もたくさんあったと思うし、私もありました。そんな話もここでトミーと一緒に出来たら良かったですね。

加古

いまここにいる人とそこに関わる人たちで、前向きなメッセージを増やしていきたいなと思います。

見形

障害者が妊娠をすることに対してもマイナスな考えで、墮胎や中絶を強要される。それはおかしい。もちろん違う医者もいるけれど、それに負けてしまっていたら、障害をもっている人たちに子育ての権利はないことになる。こうやって話したり、知ってもらう機会がすごく大事で、それが力になるのかなと思います。あとは仲間の存在がすごく大きい。同じ障害のある人が支え合っていることが大きいと思います。

さらに尊厳死という問題に社会が取りかかる前にやるべきことがあるとトミー(富田さん)は言っていました。

加古

「尊厳死」の事に取り組む前に「幸せに生きる」ということを、まず社会の中に作り出さないといけないとトミー(富田さん)は、よく言っていました。

見形

資料の23ページに尊厳死について書かれているものがあります。

生きることには保障もない中で死ぬことばかりが話題になって、美しい死に方を語ることに意味なんかないのでは。たとえ呼吸器を付けていても、生きたい…それがなぜいけないのでしょうか。

加古

トミー(富田さん)はよく言っていました。呼吸器を付けていても、どういう状況になっても生きたいということを強く言っていました。そして彼自身それにこだわって、それを実証していたと思います。

見形

トミー(富田さん)が国立療養所で出会った呼吸器を着けている人たちが「痛い」とか「殺してくれ」と叫んでいたのを目の当たりにしたと聞きました。そのときに「俺も殺してくれ」と叫びそうになったとトミー(富田さん)は言っていました。

加古

彼(富田さん)は、それはおかしいと言っていたし、生きる尊厳ということがまず保障されるようにしなければいけないと言っていました。そして、美しく死にたいという思想という尊厳死の議論に巻き込まれてはならないと言っていたし、どういう形であっても生きることを伝えていくと言っていました。今日の資料原稿の中にも彼の考え方が残っています。その思いは、みんなで引き継いでいけたら良いなと思っていますし、一番の意義であると思います。

見形

尊厳死であったり、着床前診断とか私たちの命がコントロールされてしまうことが多い中で、それに対抗して考えていくこと、何が出来るのかを考えていけないと思います。何でも自己決定という言葉だけで片付けられることはおかしいとトミー(富田さん)も言っていました。

加古

自己決定も、どちらかに追い詰められているような状況があり、こうした判断を迫られることは本当に自己決定ではない。その人がただそこにいて自体が無条件に祝福されるべきだと思います。存在を肯定していける社会作りが大事だと思います。

見形

尊厳死協会の方が、ある分科会で言っていました。自分で意思が伝えられない障害になったら死んでもいいのでは、という発言があり、会場からは激しいブーイングでした。知的障害や脳機能障害などの障害者にも関連してくる大切な問題です。その矛盾のようなものをトミー(富田さん)は指摘していました。

加古

マイノリティと呼ばれる人も当たり前の社会だと思うが、今の社会ではみんな同じということが強調されすぎて、健常者の優勢思想にあふれた社会で、「右ならえ」のようなゆがみを感じるし、そのゆがみを僕らから正していくことをしなければいけないとトミーとも話していました。

マイノリティを語るときにトミーが、よく言っていたことがあって、「妖怪が共生する社会」と言っていました。この妖怪の話は、単に彼が「ゲゲゲの鬼太郎」が好きという簡単な問題ではないです。

資料の19ページをご覧ください。

「妖怪が教えてくれるもの」と彼が書いています。

妖怪は一見すると何の役にも立たず、同じことを繰り返しやっているように見える。

例えば、「あずき洗い」という妖怪は、ひたすら小豆を洗うことに時間を費やす。

そういう一見すると合理性のない非効率なことも妖怪社会では良いこととされている。

その妖怪を一般社会に当てはめていくと、横ならえの優生思想に当てはめていったら、否定されるような存在です。それを彼は障害者の置かれている環境に置き換えて書いてくれた。

本当の共生は、異なる違いを持った者たちがひしめき合いながら社会を作っていくというサラダボールだということを彼は言っていました。サラダはいろいろな野菜があってこそサラダで、妖怪やサラダボールも人間に置き換えると本当の共生になるということですね。

見形

障害者が枠に当てはまらないといけない。その枠は健常者の言うことを聞くというようなことです。健常者の社会でも子どもを親たちのルールに乗せて育てるということがあります。

しかし、本当は百人百様の生き方があると思います。それが真のメッセージだと思います。

加古

その部分を皆さんと共有、共感しながら伝えていけたら彼(富田さん)も喜ぶと思います。

石井

これでトークショーを終わり、休憩に入ります。

質問用紙をお配りしているので、休憩時間に回収します。

石井

それでは質疑応答の時間ですが、休憩の前におくばりしたものを集計して、ご返答したいと思います。その前に指定発言の方にお話しをしてもらいたいと思います。

発言(白川さん)

私は1970年から80年まで兵庫県立尼崎病院にいました。子ども病院ではありませんが、子ども病院の労働者といろいろな闘いを行ってきました。

それは、先程も出ていました「不幸な子ども生まない運動」の闘いと、それ以後の闘いについて若干経験を含めてお話が出来ればと思っています。

先程、見形さんが言われていたパンフレットは、これだと思います。

「幸福への科学」というもので、1973年に兵庫県不幸な子どもの生まれない対策室で発行されたパンフレットです。

兵庫県が作っている「野路菊文庫」のひとつとして発行されています。

先程来の見形さんの発言やトークショーでのお三人からのお話をお聞きして、医療労働者として非常に熟視たるものがあります。

障害者や患者に対して生殺与奪の権利を持つ関係者であるということを改めて実感して気持ちを引き締めたいといけないと思っています。

障害があることが悪いことで、障害を治していくことが医療労働者としての使命であると立場に立たされ続けてきたし、そういう教育を受けて働いてきたわけです。

優生保護法といっても最近の方は分からないと思いますが、私は66年から労働者でしたので、優生保護法の改悪反対の闘いの中にも参加してきました。

子ども病院で最初に不幸な子どもが生まれない運動を考えたのは、当時の金井県知事です。

それで65年に重症心身障害児の病院である「びわ湖学園」に行事で訪れた際に可哀そうだと思って、不幸な子どもを治す手立てはないだろうかと思ったことが動機らしいです。

66年には不幸な子どもの生まれない対策室というのが衛生部でスタートし、70年に子ども病院が開設されます。青い芝の会や私たちの運動もあり、74年には「不幸」という言葉を改めて、「良い子を産み健やかに育てる運動」に変えました。子ども病院は1975(S50)年5月5日の子ども日に開設をされています。この開設は慈恵医療の頂点に立っている昭和天皇の在位50年と70年は明治100年記念でしたが、その明治100年事業のひとつで子ども病院が計画されています。

この頃の知事は金井知事から坂井知事に変わっていましたが、坂井さんは非常に天皇主義者で兵庫県の労働者に対しても日の丸君が代を強制していました。

子ども病院は、不幸な子どもが生まれない運動の基幹病院としてあり、その本質が優生思想に裏打ちされたものでした。当時は危険といわれた羊水を採って染色体を検査する羊水検査も行い、障害児を墮胎させる。

当日の対策の中身は治療をするということと、親や子どもをどうするかということについて指導と相談に乗るということで、指導室や相談室も開設しています。

その後続く障害児の抹殺行政というものが、母親や若い女性への教育や高齢出産のリスクなどを教育して不幸な子どもも生ませないという運動を作ってきたということがあります。

この運動は、今日の集会と真っ向からぶつかる優生思想そのものの具体的な取り組みだったと思うし、その後各地に広がる優生思想の運動の始まりのような感じです。

また先程からの優生保護法が改悪されるということと関連して子ども病院や不幸な子どもが生まれない運動があったと思います。

私たちは医療労働者の立場から子ども病院の職員とも一緒に闘い、県側が進める不幸な子どもを産まない運動に対して反対の行動を様々行いました。また、この運動は地域の労働者や障害者と一緒に運動を作り上げていったのですが、その後の運動は精神科の病院が3人夜勤から2人夜勤にすることに対して反対する運動を行っています。

そのような運動は老舎組合には理解されないで、労働組合と県と衛生とは事前に交渉をして妥結になっており、それを職場で覆していくという闘いを行いました。しかし、結果として2人夜勤となり、余剰の1人が配置転換になり、それを拒否するような運動も行いました。

実際に不幸な子どもが生まれない運動や病院の患者や障害者に対する優勢思想に基づく差別、あるいは抹殺の実態と闘うためには労働者自身が自らの主張と権利と患者の立場を仕事の中で代弁していくことや医者や看護部長と対決しながら伝えていくことをしなければ、障害者解放で闘っている障害者皆さんと手をつないではいけないだろうと思って闘ってきました。

富田さんは残念ながら亡くなりましたが、今日の資料を読ませていただいたら、子ども病院に入ったとありました。富田さんの入院当時は合理化に対する闘いを行っていた時期だと思います。

やはり優生思想そのものである「不幸な子どもを生ませない運動」の基幹病院で闘いきることが医療労働者にとって一番障害者解放闘争につながるし、労働者の立場から闘い切ることであると現在まで思っていますので、紹介をさせていただきました。

石井

ありがとうございます。続いて宮崎さんお願いします。

発言者(宮崎さん)

本日の資料にも書いてあります主催の「障害者・マイノリティなどの人権と生活を考える会」の宮崎と言います。私たちの会は富田さんも一緒になってやっていたのですが、きっかけは去年の秋に精神障害当事者で、性同一性障害でもあった方が障害者自立支援法と生活保護のことで、死を持って問題提起をされました。そこで、三障害の人やセクシャルマイノリティのことについてお互いを知ることから始めようとスタートしたばかりでした。今日はセクシャルマイノリティの立場からお話します。

セクシャルマイノリティについてですが、私の付き合っている人は男性です。

世の中の多く人は異性に興味を持つ人が多いと思いますし、それが普通のこととお考えでしょう。しかし、僕たちゲイとかレズビアンと呼ばれている人たちは常に回りを意識して生きていかなければいけない。障害者の人たちも同じだと考えています。障害者であることを意識させられて生きている。

セクシャルマイノリティの問題、障害者の問題とよく言われますが、障害者の問題は健常者の問題であり、セクシャルマイノリティの問題はセクシャルマジョリティの問題であると思います。

そういった捉え方を社会がしていけるようにしなければいけないと思っています。

優生思想は、障害のある人たちが生まれてくるのは良くない、障害のある人たちが親になって子どもを生むのも良くないという考え方ですけれども、ゲイとかレズビアンやトランスジェンダー(性同一性障害)の人たちが差別されるのも障害のある人たちが近い。子ども生まない生殖は無価値なものであるという考え方だと思います。

厚生労働大臣だった方が女性は産む機械であると言っていたのは、口が滑ったのではなく、本音だと思います。国家にとって健康で働ける人が必要だという価値観だと思うのですけれども、こういう考え方は戦争の時に多く流布されますが、ナチスドイツがユダヤ人を弾圧し、虐殺した話は有名ですが、障害のある人やセクシュアルマイノリティの人たちも殺されていきました。

ユダヤ人は胸にダビデの星をつけられ、セクシュアルマイノリティは逆さまの三角のピンクの印(ピンクトriangle)をつけられて収容所に送られました。

そのように性が個人の生き方とかかけ離れたところで、子どもを生むものとかに限定されたり、欲望の対象だったり、個人の生き方や他人との関係の作り方などが関係なしに語られていることが問題であると思っています。

札幌でもセクシュアルマイノリティや障害のある人たちによるレインボーマーチというパレードが今年で 11 回目になりますが、こういう形で常にアピールしないと自分たちの存在はないものとして扱われてしまうし、マイナスのメッセージが多い。

特に中高生が自分の存在や性の問題を考え始めたときに、常にそういう壁にぶち当たる子が多い。その年代の 7%くらいがセクシュアルマイノリティだと言われていて、いじめに合っている人もいます。また、セクシュアルマイノリティは社会に受容されないで、それが原因で精神疾患になる人も多いという現状です。

セクシュアルマイノリティに人だけではなく、障害のある人や社会の中で排除されている人たちの連帯を作り出していかなければいけないと思っていますので、皆さんも是非ともレインボーマーチに参加してください。

今日の集会では富田さんが準備されている話しをお聞きしていましたが、非常に多くの方々が参加していることに嬉しく思いました。そこで改めて富田さんが残してくれたものは何だろうと考えたのですが、人工呼吸器をつけながら地域の中で生活していくは大変なことだったと思います。当たり前で地域の中で生きていくということが闘いだったのかと思いました。

私たちセクシュアルマイノリティも当たり前で生きていけない現実がありますから、富田さんが作ってくれた出会いを大切に皆さんと一緒にやっていきたいと思っています。

石井

ありがとうございます。皆さんからいただいている質問を読み上げていきます。

まず初めにご意見ですが、『私も約 20 年間入院生活を送ってきたもので、資料の中で富田さんが書かれているように全介助に近いものだったので、病院の時間の都合で生かされてきました。そういう中に長い間いると自分は何も出来ないもの、介助なしでは生きられないのなら、生きていない方がいいのかなと思ってしまいます。病院の中では自分はないのです。現在、日中は酸素、夜間は呼吸器を使用し、経管栄養で毎日夜点滴をしながら在宅で生活をし、仕事や活動をしています。在宅生活を始めてから相変わらず介助を受けての生活ですが、病院と違い、介助を受けるのも介助者に自分が何をしてほしいのか、自分の意思を伝えて行ってもらいます。ここには自分があるのです。どんなに重度の障害者であっても誰もがうまれてはならないもの、生きていていけないものはいないし、誰が「生まれてはいけない」「生きてはいけない」と決めるのですか。今回、富田さんの意思を受け継いでこのセミナーが行われたことはとても嬉しいです。今回の問題をあやふやにせず当事者として、一人の人として声を上げていきましょう』。

続いて質問ですが、『ボランティアのグループがよく施設訪問に行くけれどおかしいよね。何で慰めるの。変なことがこれまでもずっと続いてきたけれど、共生や共に楽しむということを考えてほしい』とありましたが、これはお二人いかがでしょうか？

見形

よく慰問と称して障害者施設、病院や特養、刑務所へ行きますが、これは慰めの対象になっていると思います。障害を持っている人は、何とかしてあげたい対象になりやすい。しんどくて辛い状況で不幸な存在なのです。だから元気づけてあげたいということでしょう。でも、その行為に対して彼らには悪気がない。私たちは勇気付けられて、頑張りなさいと言われてきましたけど、私たちだってたくさん頑張ってきました。トミー（富田さん）も言っていました、生きることが日々闘いなんです。

そういう闘いがない社会、生きることに闘う社会というのはおかしなことなので、それを変えていかなければいけないと思います。そうでなければ、このセミナーの意味がなくなってしまいます。

共生社会と叫ばれて久しいのですが、1981 年に国際障害者年で完全参加と平等ということは世界的にも謳われ、インクルージョンとか言われています。DPIの活動もそうですよね。障害者の権利を取り戻していこうとやっていますが、いまだに実現したとはいえません。

そうした現実を押さえつつ、その社会を変えていくことが私たちの役目だと思いますし、変えていけると信じています。

加古

障害者が可哀そうな存在とか、劣っている存在とかに見られるというのは、そう見る人が悪いのではなく、そう見てしまう背景というのがあると思います。一人ひとりが「ノー」ということも大事ですが、みんなで背景にあるものを考えていくということも大事だと思います。

石井

『世界の中心は健常者だけじゃないよ。世界の流れは、もう障害者が作っていると思うよ。何故なら今日のセミナーがすべて障害者のみんなで作っているから。そうは思わないかい』

加古

嬉しいですね。今日のセミナーは富田さんが作ってくれて、準備を進めたのは障害者の人たちです。

しかし、今回問題にしているのは、今の社会には、優勢思想が根強くあるということです。着床前診断が行われている背景には障害者はいない命というような考えがあります。どこかの県知事が優良の遺伝子と弱い遺伝子があると云ったのですが、そういう思想がはびこっている。それに対して私たち障害当事者は異論を唱えていかなければならないと思います。見過ごすことは出来ませんし、富田さんも声を上げないといけないと言っていました。

私たち一人ひとりが声を上げないと優勢思想という大きな波にのまれてしまう。

少しずつ障害者が共存できる環境が出来ていることも事実です。これは重度の障害のある人たちが勝ち取ってきたものです。だからこそ、おかしなことには引き続き声を上げることが大切だと思います。

見形

障害者の方が多くなると健常者はマイノリティになります。しかし、どちらかがマジョリティかマイノリティになればいいという問題ではなく、みんながその人らしく生きることだと思います。

今は残念ながら障害を持っていない人が規準になっている。その転換が必要です。

みんなが支えあって生きていける社会を作ることが必要です。

個人が尊重される社会を目指していきたいと思っていますが、今は重度の障害を持つ人やこれから生まれてくる障害のある子の命が脅かされている。それは避けたいことなので、「違う・間違いだよ」と伝えていきたい。

石井

『石原東京都知事が府中の障害者施設を訪問したときに、彼らには人格があるのかと云って物議をかもした。新聞にも出た人権問題として障害者団体は謝罪を求めたと聞くが、彼は謝罪をしたのか』というこのことについてお聞かせください。

加古

こういう発言があったことも障害者団体として抗議文を送ったことも事実です。

見形

DPI日本会議とJIL(全国自立生活センター協議会)で抗議文を送っていますが、謝罪はないと思います。

加古

そもそも、そういう部分に問題意識がないのだと思います。失言が多いのですが、障害者が不幸な存在であるという考えが根底にあるのだと思います。

見形

今年、愛知県でもありましたし、私の地元の埼玉県でも知事の発言に「優れたものが劣っているものを助ける使命がある……」というものがあり、抗議をしました。最近こういう失言が目立ちますが、そういう人たちが地方や国のトップにいることが怖い。しかし、私たちがそういう人たちを選んでいるんですね。だからこそ、選挙での私たち障害当事者の一票は大切だとトミー(富田さん)は言っていました。トミーは北海道で病院もまわり、投票に行こうキャラバンをやっていましたが、そういうことが大切なのだと思います。

石井

そろそろ時間ですので、最後にお二人からコメントを頂き、終了したいと思います。

加古

今日こういうセミナーが出来たことを本当に良かったなと思います。トミー(富田さん)と、こういうセミナーについて話をしていたのが、今年に入ってからです。神経筋疾患ネットワークというのがあるのですが、その中で、彼は「障害があってもええやんか」という議論を巻き起こしたいとすごく言っていました。その先駆けとなることを札幌で始めたいと言っていました。

こういう声を上げていくことに対して彼とは共感し、たくさん話をしました。

このセミナーでの話しは、ここだけで終わる話ではないです。彼の願いは、こういった話があちこちで行われ、みんなが真剣に考えられることが出来るようになることだと言っていたので、引き続き、他の地域でも始まっていくように働きかけていきたいと思っています。

そういう思いを皆さんにも共有していただいて、今後の大きなスタートにしたいと思います。今日はありがとうございました。

見形

長時間に渡り、命や女性や障害者の人権について、優生思想が根底にあるということでお話をしてきましたが、トミー(富田さん)が本当に伝えたいことを最後に聞けなかったことが悔やまれます。

「これで良かったの」と聞きたいくらいです。

でも精一杯、かこっち(加古さん)も雅子(石井さん)も私も、DPI北海道ブロック会議の人たちもマイノリティの会の人たちも協力してくれましたし、今日来てくださった皆さんのお陰で本当にいいイベントが出来たと思うので、北海道でもこれからたくさん議論が始まって全国に種がまかれて、私たちが障害のあるこのままで生きていける社会が実現できるように変えていきたいと思っています。

本当に今日はありがとうございました。

石井

閉会の挨拶として障害者マイノリティなどの生活と人権を考える会の太田さんにいただきたいと思います。

太田

今日は今までにない良い勉強をさせていただきました。富田さんがこのように良い企画してくれたことに対して、本当に心から感謝しています。

それから、本日のために遠いところから来ていただき、セミナーを主導していただいた、加古さん、見形さん、石井さんに感謝申し上げます。写真が飾られています、富田さんも参加しておられました。

また、非常にいいなと思ったのは皆さん愛称で呼び合うことでした。

心からの付き合いをされているだろうと思いました。そういう意味では富田さんは幸せだったと思います。葬儀が終わって3日が経ちましたけれども、あの世でゆっくり休んでいるのだろうと、そして、今日の会合を朝から見て、良い会合になったと思っているでしょう。

皆さん本当にありがとうございました。

富田さんの意思を継いで私たちは運動を続けていきます。

発言いただいた三人の方々からも何か行動を起こさなければ変わらないということを改めて教えられました。そのために私たちが何をしなければいけないのかという問題を提起していただいたと思います。どうもありがと

うございました。

これを持ちまして終了しますが、最後に要約筆記の方々と手話通訳をしていただいた方々に感謝申し上げます。



(会場内に貼り出した富田さんの写真)